

神代種亮稿『坪内逍遙著書目録』翻印と解説 (一)

出口智之

神代種亮(明治十六年六月十四日(昭和十年三月三十日)は(1)、  
 帯葉あるいは七松庵主人と号し、俗に「校正の神様」として知ら  
 れる編集者・文学研究者である。島根県鹿足郡津和野鷺原村(現・  
 津和野町)に生まれ、島根県師範学校を卒業、しばらく小学校で教  
 鞭を執ったのち、明治末ころに上京した。上京後の経歴については  
 断片的な情報しか伝わらないが、永井荷風「溷東綺譚」巻末の「作  
 後贅言」には、「海軍省文書課、慶応義塾図書館、書肆一誠堂編輯  
 部其他に勤務した」とある(2)。実際、慶應義塾図書館初代館長、  
 田中一貞が著した『講義かばんの塵』(岸田書店、大正四年七月)で  
 は、その造本が神代の「考案苦心」によるとされ、巻末には「慶應  
 義塾図書館囑託 神代種亮先生著 ポケット誤字便覧」の近刊広告  
 も確認できる(3)。このほか、岡野他家夫は「大正末年頃まで海軍  
 文庫の図書係として勤務した」とし(4)、島根県師範学校の一年後  
 輩であった後藤政兵衛は、「一時浅草あたりの小学校に勤務したこ  
 ともあるらしい」とも述べている(5)。

右で広告されている『ポケット誤字便覧』は、「有らゆる誤用文

字を蒐集して之を系統的に分類し」た本とのことで、「杜撰なる字  
 典を盲信するは頗る危険なり」という惹句も見える。ここからは、  
 彼が大正前期の時点ですでに、漢字の用字や字体の正誤に強い関心  
 を寄せていたことがうかがえる。その名前が広く知られるようにな  
 ったきっかけは、『東京朝日新聞』夕刊の「読者課題」欄に寄せら  
 れた、「校正の神様」神代種亮氏について校正の話や経験談その他  
 面白い話を聴いて下さい」という問合せだった。これに応え、大正  
 十三年十一月二十五日に掲載された記事は、彼の文字への興味とそ  
 の人となりとをよく示している。

書物を繕けば片ツ端から誤りを正して行く、それが学界の巨人  
 であらうが官界の大官のものであらうが構つたことではない間  
 違ひは間違ひとして場合によつて遠慮なく指摘して反省を求め  
 るのである(中略)神代氏は幼い頃から正しい字劃の漢文を修  
 業して来た、この習慣に養はれていまの印刷物を見るやうにな  
 つてからは誤り多い活字に対して極端な文字の潔癖家になつて  
 終つた

記者はさらに、こうした人物像を裏づける逸話として、大正元年発行の教科書『美談読本』の誤りを「美濃野紙一枚の全面に書並べ」、「文部大臣に差出した」一件を伝えている。また、神代が「文部省で発表した『常用漢字』の欠点を書き上げて原稿の校正に来た」ことも附記されている。これらの記述からは、彼の関心が狭義の校正、すなわち誤植や体裁上の不具合の修正だけでなく、活字等の字体や用字の方面へと広がっていたことが知られる。というよりも、そのインパクトの強い異称とは裏腹に、厳密な誤植修正はむしろ不得手なほうだったらしく、『明治文化全集』の編纂で同席した柳田泉は次のように述べている。

正直にいふと、校正の神様はよく校正違ひをして同人間に笑を残した。だが校正の講釈をさしたら正に天下一品の体があつた、大抵の人はこれで一遍に参つたらしい。又書物に対する知識も、製本のテクニクに關すること、活字に關する知識は専門的なものをもつてゐた。<sup>(6)</sup>

同君は、そのころ校正の神様の名があり、同人にむかつても文字の説明を度々試みて感心させていたから、それ（『明治文化全集』の校正担当——出口注）が好いとなつていた。ところが、この神様は、文字の講釈は上手であるが、校正は上手でない。今でもそれがよくわかるが、全集の第一回配本で、解説中の自分の名を神田（四号活字）と誤植してある。そのほか、いろいろな例があるが一番困つたのは、本文の脱落である（現に、『十二の石塚』などには一節数行そっくり落ちている——今回訂正）。それで、みなで相談して校正は分担ときめることにした。<sup>(7)</sup>

実際、たとえば芥川龍之介『黄雀風』（新潮社、大正十三年七月）や『新選谷崎潤一郎集』（改造社、大正十三年十二月）、『桂月全集』全十二巻（興文社内桂月全集刊行会、大正十一年〜十三年）など、「神代種亮校」と記された本を見てみても、際立って誤植が少なくないと言いがたい。こうした状況にかんがみれば、彼を校正事務の熟達者とするのは適当でなく、広く流布している「校正家、とても言うより仕方のない崎人伝中の人」<sup>(8)</sup>というイメージは、その異称に引きずられたものと考えるべきだろう。もともと、柳田の回想からもうかがえるとおり、この名を好んだのがほかならぬ神代自身だったこともたしかである。『東京朝日新聞』の記事掲載から五年半ほど経った昭和五年五月、彼は自身の編集する雑誌『校正往來』に記事全文を再掲したうえで、「『美談読本』は『英語読本』である」、「『文部大臣』は『文部省図書課』の誤り」、「『幼い頃から正しい漢文の修業をして来た』とあるのも事実ではないので、「子供の時から字引を玩具にしてゐた」と話しただけであつた」と、いかにも校正家を思わせる訂正を加えている。<sup>(9)</sup>

いま、おそらくは神代自身によって増幅されたイメージにとらわれず、あらためて当該記事を読みなおすと、次のような紹介が目につまる。

神代氏は読書を生活のやうに思つてゐる人である、起きてから眠る迄を殆ど書齋に籠つてゐる、従つて蔵書も多い、珍本も集めて居れば愚本も奇書も少くない（中略）壁はスツカリ珍本奇書で蔽はれてゐる、現農相高橋是清氏が訳した『衣服化粧』<sup>(10)</sup>といふやうな珍本もあれば坪内逍遙博士が『春の舎おぼろ』の名で書いたいろ／＼なものやら市場で求め得られぬ奇書もある、春

の舎の小説『贗もの』の如きは執筆者の坪内博士も忘れてゐたものでいまは日本にたゞ一冊のものになつて居る／坪内博士もこの本には『確かに自分の執筆したものだ』といふやうな裏書をしてゐる<sup>(10)</sup>

一見、単なる蔵書家としての紹介に見えるこの文中で、坪内逍遙の著書の蒐集が特筆されているのを見落とすべきではない。この記事が掲載された大正十三年十一月といへば、関東大震災から二ヶ月を経て、吉野作造や尾佐竹猛らの主唱により明治文化研究会が創立された、まさにその月であつた。その結成時に神代は参加しておらず、会への合流はもう少し先のことらしいのだが、ここからは彼がそれよりもずっと以前から、逍遙初期の著作に注目し、資料的整備を独自に志していたことが知られるのである。そうした研究の結実として、神代がこのころ発表した、逍遙の初期作品に関する論考を一覧にしてみよう。

- ① 「『三説』<sup>(11)</sup>「当世書生氣質」異本考」(『書物往来』大正十三年七月)
- ② 「小説神髓」「書生氣質」解題」(『早稲田文学』大正十四年六月)
- ③ 「春廻家牘」「新雙六淑女鑑」解題」(『新旧時代』大正十四年十二月)
- ④ 「小説神髓」解題(坪内逍遙著・神代種亮校訂『明治文学名著全集』第三篇「小説神髓」所収、東京堂、大正十五年二月)
- ⑤ 「『三説』<sup>(12)</sup>「当世書生氣質解題」(坪内逍遙著・神代種亮校訂『明治文学名著全集』第一篇「当世書生氣質」所収、東京堂、大正十五年三月)
- ⑥ 「書生氣質校訂余談」(『早稲田文学』大正十五年三月)

⑦ 「<sup>(13)</sup>「内題」未来の夢解題」(『京わらんべ解題』(坪内逍遙著・神代種亮校訂『書物往来』未来の夢 附京わらんべ)、明治文化研究会、大正十五年七月)

⑧ 「没理想論戦一挿話」(『新旧時代』大正十五年十月)

⑨ 「『京わらんべ』解題追補」(『新旧時代』昭和元年十二月)

⑩ 「<sup>(14)</sup>「論議」自由太刀余波鋭鋒解題」(『明治文化全集』第十四卷「翻訳文芸篇」、明治文化研究会、昭和二年十月)

⑪ 「逍遙先生の事ども」(『太陽』昭和三年一月)

これらはいずれも、逍遙初期文学の研究に、とりわけ書誌学的側面から先鞭を付けた、重要な成果である。たとえば『<sup>(15)</sup>「内題」未来の夢』は、明治十九〜二十年に晚青堂が初版およびその合本を刊行したのみだったため、⑦の神代による全文紹介と解題を待たねば、一般の読者にはその存在すら知られていなかったはずである。同時に紹介された「京わらんべ」も、初版である明治十九年六月の日野商店版、別本である同年五月の文苑閣版と明治二十一年四月の文事堂版しか存在しておらず、特に後二者は稀覯であつたため、本文を提供しつづつそうした異本の存在まで指摘した⑦⑨は、文字どおり逍遙研究の端緒に位置するものであつた。

あるいは、逍遙が起案した双六に関する解題(③)も、きわめて異色である。この双六は書籍でさえなく、一枚刷りの玩具であつたため、大正末までの残存数は著しく少なかったと考えられる。神代はそれを、逍遙自身が架蔵していたなかから見つけ出し、影印・翻字・解題をあわせて紹介したのであつた。文学者の構想による双六は、明治二十年代から三十年前後にかけて流行したことが知られており、その先駆となつた逍遙の作品への着目は、大正末年の段階と

は思えないほどの、神代の卓見を示している。彼はこうした逍遙研究のほかにも、様々な作者による明治初期文学について解題を執筆しており、この方面での存在感は校正者としての仕事をはるかに凌駕していると言つてよい。

明治文化研究会で神代に同席した柳田泉と木村毅は、ともにこの点を評価し、彼が昭和十年に他界したおりの追悼文には、次のように記している。

種々な点を除しても、明治文化研究方面では一方の重鎮であり、明治文学研究でも、書誌学的研究に口火をつけた点で功労者たるを失しない。たゞその態度に余りに好事的分子が多かつた割合に、学問的良心の尖鋭さが足りなかつた。私なども、此の点で君の好事的態度をあきたらなく思つてゐた一人だ。<sup>11)</sup> 明治文学研究が今日の盛大を致したのには、神代君は確かに大きな役割を遂げた。その事だけは充分に高く評価していゝ。研究を煩瑣学風にはしたが、その代り、今迄大雑把に見過ぎされて来てゐた事で、神代君の指摘のために、明かになつた事が多い。<sup>12)</sup>

木村毅の言う「神代君の指摘」とは、「小説神髓」上巻に見える、「菊池大麓大人が訳されたる修辞及華文と題せる小冊子」のことである。神代はその「小冊子」の実物がきわめて稀観になつており、原文が確認できない問題を諸家に対して提起し、その指摘から数年の後に、「私は勿論知らなかつた」という木村がようやくそれを発見したのであつた。彼が明治堂で買ったその書が、『明治文化全集』に入つてゐるテキストに「なり、「小説神髓」以前の西洋修辞学受容のありかたを示す、この訳述に関する研究を可能にした。

現代における注釈研究の方法からすれば、いわば当然の確認とも思えるが、そのことは逆に、神代が大正末年の時点ですでに、現代にまで通ずる研究手法を確立しており、その後の明治文学研究の原点となつたことを証し立てている。

さて、神代種亮という存在を以上のように捉えなおし、その逍遙研究をあらためて見なおすと、彼が発表を企図しながらはたせなかつたらしい、もうひとつの研究成果があつたことに気がつく。②の冒頭で言及されている、「近く予の刊行せむとする小冊子を以て公にすべき坪内逍遙著書目録稿本」である。研究の早い段階でこのように示唆されながら、当該稿本が実際に刊行された形跡はなく、逍遙の本格的な著書目録は滝田貞治『逍遙書誌』（米山堂、昭和十二年二月）まで待たねばならない。この本はのちに昭和五十一年の修訂を経て、現在でも逍遙の著作に関する基礎的文獻となつていて、それよりも十年以上前に、神代の手になる著作目録が作られていたことは興味深く思われる。

この幻の稿本について、先年、神代の遺族に伝わつた多数の資料が新しく確認され、そのなかに仮綴じの状態で残存しているのが見つかつた。特に前半部はていねいに清書のうえ、組版のための指示も書き込まれていて、刊行が現実的に視野に入つていたことが見て取れる。それが未成に終わった事情は不明だが、一つには②がこの稿本から「一部を抄出したるもの」とされているように、必要に応じて抄出とその際の追補とを繰返し、あらためて全体を刊行する意義が薄れてしまつたのかもしれない。あるいは、後半には神代以外の別筆による抄写も混在している点を見ると、さらなる網羅性を期して調査を続けながら、柳田の言う「好事的態度」のためか完遂さ

せられず、そのままになってしまった可能性もあろう。<sup>13)</sup>

その内容についても簡単に概観しておく、異本にいたるまでの網羅性や書誌的事項の詳細さなどの点で、『逍遙書誌』の水準にはおよばないものの、②と相前後する大正末年の時点では、公開されていけば重要な先駆的基礎文献になったものと思われる。特筆すべきは、随所に逍遙の直話や、当時未公開だった逍遙日記からの引用が差し込まれていることで、その点でも貴重な資料だったと言える。もともと、いま述べたとおり、そうした直話等を含む重要部分の多くは、神代自身によって別稿として発表されているし、柳田泉の『政治小説研究』全三卷（春秋社、昭和十年五月～十四年七月）や『若き坪内逍遙』（同、昭和三十五年九月）をはじめ、その後の研究が本稿本を凌駕する精度に達しているのも当然である。したがって、たとえば冒頭の『（註）春窓綺話』に関する直話は現在まで未発表ながら、『若き坪内逍遙』にはさらに詳しい直話が録されているといったように、逍遙研究という範疇でここから新しく判明する情報はかぎられている。

本稿本の価値はむしろ、大正末年当時の逍遙研究の水準を明らかにし、その後の研究が形成される原点を描き示している点にある。先に見た①～⑪が、公刊されて一般に参照可能な逍遙研究の端緒であったとすれば、本稿本はそれらを準備した隠された地盤であり、まさに現代まで続く研究のもともとの起点にほかならない。たとえば、逍遙の初期作品である『（註）清治湯講釈』（『東京絵人新聞』明治十五年九月十三日～十二月二十六日）は、第四・五回の原紙が失われており、神代が逍遙架蔵の自筆稿本から翻字した『太陽』昭和三年一月掲載の本文によってしか伝わらない。この単行本にさえなら

なかった作品について、本稿本の「補遺」において連載状況が整理されていることは、神代がいかに早くからこうした初期作品に着目し、整理を試みていたかを物語っている。

あるいは、「備考」として録されている逍遙が諸書に寄せた序文は、明治二十年前後の文学状況において、彼が果たした役割の考察を準備するものである。そのような知見や情報は発表こそされなかったものの、先に見た木村毅の証言から知られるとおり、神代はそれらがある程度、明治文化研究会の人々に語っていた。そして、その知見の背後に本目録が存在していたことは、②の冒頭での言及を待つまでもなく、同時代の周囲の人々には承知されていたはずである。だとすれば、柳田や木村らが展開したその後の逍遙研究は、いわば神代の作った地盤を意識し、それを乗り越える形で形成されていったことになり、その意味で昭和初期に花開く逍遙研究の方向性を決定づけた本稿本は、明治文学研究史における神代の位置づけの再検討をうながしていると言える。

なお、神代が本稿本の仮の成立後も調査を続けていたことは、注13に示した資料のほか、遺族のもとで同時に確認された、全三十四通におよぶ逍遙からの来翰によっても知ることができる。それらの来翰からは同時に、逍遙が『逍遙選集』全十二卷＋別冊三卷（春陽堂、大正十五年九月～昭和二年十一月）の編纂に際し、神代の知見を頼っていたことも見て取れる。そうした一連の資料については、別途秀明大学出版会より単行本として紹介を予定しており、本稿はその刊行に先んじて「著書目録」稿本を紹介することで、相互に補いつつ、日本近代文学研究の出発点の解明に供するものである。資料の概況および翻字に際しての方針は、以下のとおりである。

- 一、稿本は神代家蔵。大部分は左下に「10、20 さかゑ堂製」と表示のある二十字×二十行の朱罫原稿用紙に筆記され、一冊に仮綴じされている。ただし、随所に様々な料紙による貼紙が施されており、また第五十四丁以下も多様な料紙が混在している。実際には半丁分ではない二十字×十行の原稿用紙片面書きも、かりにこれを一丁と数えるならば、全六十二丁（表紙別）。一部は各丁のオモテ左上枠外にノンブルが振られているものの、欠番や挿入も存在するため、これをそのまま丁づけと見なすことはできない。筆記者はおおむね神代種亮自身と推定されるが、第五十四丁以下には別筆も認められる。筆記具はペン・毛筆・鉛筆で、インクは黒・セピア・朱などが用いられている。
- 一、翻字に際しては、原則として原資料に忠実に翻字し、仮名遣いや漢字の誤りはあらためず、また仮名の清濁も原資料のままとした。ただし、誤植と誤解されやすい文字については、右傍に「〔ママ〕」を附した。
- 一、漢字については、常用漢字・人名用漢字の字体を用い、別字を除く異体字・同字・俗字等はすべて現行の字体にあらためた。
- 一、反復記号については、漢字は「々」、平仮名は「ゝ・ゞ」、片仮名は「ゝ・ゞ」、仮名二文字以上は「く・く」に統一した。
- 一、原本の行移りは再現せず、原則として追込みで表記した。ただし、意図的な改行については採用し、インデントも必要に応じて判別可能なようにした。
- 一、欄外等への書き込みについては、挿入箇所が明らかなものは本文中に組み入れ、そうでないものは別枠を設けて表示した。た

注

- 一、翻字者の責任において判読できなかった字は□で示した。
- 一、見せ消ちおよび抹消は原則として翻字せず、修正された文字のみを翻字したが、一部の必要と考えられるものに関しては、当該文字に二重取り消し線を掛けて表示した。
- 一、翻字者による注記は、「( )」の中に示した。
- 一、丁数については、表裏のあらたまる箇所に「1オ」の形で小書き表示した。この場合、当該表示までの本文が一丁表に、続く本文は一丁裏に記されている事を意味する。
- 一、翻字者の責任において判読できなかった字は□で示した。
- (1) 「種亮」の名前の読みについては、柳田泉が「吉野作造先生と宮武外骨翁(一)」（『新版明治文化全集月報』五、日本評論社、昭和四十二年九月、四頁）において、「神代種亮たねあき（これはタネアキとよむのだと何度もきかされた）」と記しているため、これまで「たねすけ／たねあき」が併行して行われてきた。このほど、本稿本に挟まれた形で神代自身の名刺が確認され、そこに「神代種亮たねあき」のルビが振られていることから、「たねすけ」が正式であった蓋然性が高まった。なお、遺族によれば、神代家においても「たねすけ」と呼び慣わされてきたとのことで、柳田に対する「タネアキとよむのだ」という発言の意図は不明である。
- (2) 永井荷風「溼東綺譚」（『荷風全集』第十七卷、岩波書店、平

- 成六年六月)、一八二―一八三頁。
- (3) 横浜市立図書館本・東京大学総合図書館本(いずれも第三版)・国立国会図書館本(第五版)で確認。ただし、大正四年七月七日発行の初版に対し、第三版は同月十五日、第五版は同月二十日の発行となっており、実質的にはいずれも初版に近いものと考えられる。なお、『ポケット誤字便覧』の刊行は未確認。
- (4) 岡野他家夫『書国崎人伝』(桃源社、昭和三十七年六月)、四六頁。
- (5) 後藤政兵衛「帚葉山人神代種亮小伝」(『文学散歩』昭和三十八年四月)、七四頁。
- (6) 柳田泉「神代種亮君」(『明治文化』昭和十年五月)、五頁。
- (7) 柳田泉「吉野作造先生と宮武外骨翁(二)」(前掲)、四頁。
- (8) 谷沢永一「文豪たちの大喧嘩——鷗外・逍遙・樗牛」(新潮社、平成十五年五月)、二八四頁。
- (9) 神代種亮「東京朝日新聞」抄」(『校正往来』、昭和五年五月)、二五頁。当該記事の執筆者が、瀬川源吉であったことも伝えている。なお、この『東朝』掲載記事には誤植が多いが、これについては神代自身、「原稿の校正に来た」とあるが、此れは談話の不足を補ひに社へ行ったことなので、私自身で此の原稿を校正したり又はゲラ刷りを校正したのではない」としていることを附記しておくべきだろう。
- (10) ただし、前掲の神代種亮「東京朝日新聞」抄」によれば、この「日本にたゞ一冊」も「何かの間違ひ」とのことである。
- (11) 柳田泉「神代種亮君」(前掲)、五頁。

(12) 木村毅「神代君のこと」(『明治文化』昭和十年五月)、五―六頁。

(13) なお、本稿本には「舌代」とした、これを世に示す手段とさならぬ稀観本の所在とを探る神代の印刷書簡(巻末に翻字)や、②に対して追加の情報を寄せた大正十四年六月十九日付の安藤次郎書翰、文苑閣本『京わらんべ』の情報を寄せた大正十四年もしくは十五年七月十日付の船越政一郎書翰(ともに翻字せず)などが差しはさまれており、神代が調査を続けていたことの傍証と見てよいだろう。

\* 本稿本の公開について快くご許可を賜った神代聡さんに、深く感謝申し上げます。

\* 本翻印は三分載の予定である。

【翻印】

〔表紙〕

明治文学史料叢書  
坪内逍遙著書目録

「書生氣質」「妹と背鏡」「未来の夢」「1オ、1ウ、2オは白紙」

30 心の解剖「2ウ」

坪内逍遙著書目録

(書名) (種別) (冊数) (版型) (発行年月) (発行者)

早、大

春窓綺話 (翻訳小説) 二冊 洋装四六版 明治十七年一月 坂

上半七

「服部誠一(号撫松)纂述」とあれど「3オ」も、其の実は当時(明治十五年)大学に在学中の高田早苗、天野為之、坪内雄蔵三氏の共訳にして、大部分は坪内氏の筆なり。Walter Scottの *The Lady of the Lake* を小説体に綴れるものなり。『初め「春江奇譚」と題したり。原稿料貳拾円にて明治十六年の夏頃間接に服部誠一に売渡したるもの。』(作者直話)  
作者又曰く『天野氏は漢詩の一部を「3ウ」担当せしのみにて、

物語の文章には与らざりき。』

口絵、挿絵(二十四葉)共に邨田良知の画くところ。  
〔4オ〕

春風情話 (翻訳小説) 一冊 洋装四六版 明治十七年? (二三四月)と追記) 中島精一

「橋頭三著」とあれども、其の実は坪内氏の筆なり。『Scottの

*The Bride of Lammermoor* の約四分の一ほどを意識せるもの。

口絵並びに挿絵は亭齋年参の筆になり、草双紙式にして徳川風俗に画き、文体は馬琴調なり。』(作者直話)

此の本は故ありて慶應義塾図書館に「4ウ」でも十五年以前より搜索し居れども未だ之を獲ずと云ふ。〔5オ〕

齋 柳田

自由太刀余波鋭鋒 (翻訳戯曲) 一冊 洋装四六版

早、大

明治十七年五月 東洋館

「該撤」はカイザアの支那音訳なり。「じゆうのたちなごりのきれあぢ」と読む。杉目の総クロースにて、背に金文字あり。三方は朱の磨き染めにして、当時としては頗る新様の装幀なり。表紙に横に活字にて「沙比阿翁原撰」  
「文学士坪内雄蔵訳」とあり。挿絵(十葉)は渡辺省亭の筆。定価一円五十銭。  
『Shakespeareの *Julius Caesar* を翻訳せるものにして、我国に於けるシエクスピヤの翻訳の単行本は之を最初とす。〔5

紙数305  
活字  
明五号二部オキ  
奥附 省亭  
ブルータス(山田一郎訳ノコト)

「小野梓の題言、依田学海の序文、山田喜之助の跋文は皆作者の与らざる所なり。」(作者直話)

東洋館は小野梓「6才」

悲憤慨世士伝 (翻訳小説) 一冊 洋装四六版 明治十八年二月 晚青堂 早、大

表紙に「英国ロルド、リットン著」「日本逍遙遊人訳」とあり。口絵並びに挿絵(十二葉)は石版刷(画者不明)。定価壹円貳拾銭。作者の日記に拠れば、起稿は明治十七年六月なり。

Lord Lytton の *Rienzi* を翻訳せるもの。『晚青堂問野秀俊氏は山本金助氏(長谷川如是閑氏の嚴父)と共に浅草花屋敷を創設せし「6才」人にして、同時に素人出版業を始めしなり。』(作者直話)

後篇は小川為次郎の訳に少しく坪内氏の加筆せしもの。今其の某物に據するを得ざるを以て解説を後日に期す。「書生氣質」の巻末に附したる本書の広告文次の如し。

紙数  
活字

右は英国の小説大家ロルド笠頓翁が物されたる羅馬の俊傑莉延自が外伝を訳したる者なり莉延自が身匹夫より起りて羅馬の狂瀾を挽回し自由の政体を建たりしは前後空絶の偉業にして読史家の已に驚歎する所なり此書は其奇蹟を経として巧妙新奇の脚色を緯としたる者也悲壯淋漓の物語は専ら事実より成り婉曲閑麗の脚色は重に作者の趣向より出づ後篇の発兌亦近きにあり四方の大人請ふ愛翫を賜へ「7才および貼紙」

小説神髓(論文) 二冊 和装半紙型 上篇 明治十八年三月 東京稗史出版社/上下 明治十九年四月 松月堂

作者の直話に拠れば、起稿は明治十七年にして、腹案は其の前年なり。上篇の一部は明治十八年三月稗史出版社より分冊式に刊行されたるも、幾も無く同社失敗の爲め中絶となり、翌十九年に至りて上下二冊更めて出版されたるものなり。作者の日記明治十八年三月七日の条下に『中尾直治来る。小説「7才」神髓の予約を為す。』(註。中尾は東京稗史出版社主なり)。又同二月十一日の条下に『此日より小説神髓を綴り始む。』(作者自註。綴り始むとは起稿の意にあらず、写し直すの意なり)。とあり。又同年七月二十日の条下に『金玉社へ行く。小説神髓の原稿を復す。時事新報へ投書せんとするなり。』(作者自註。金玉社は印刷所なり。書生氣質と同時に出版せんと「8才」せしものが中絶となりし爲め、全部を一日も早く世に公にせんとして斯かる企てを為したるなり。但し果して投書したるか否か記憶せず)とあり。又明治十九年三月三十日の条下に『中絶せし小説神髓前週より世に出づ。中々に迷惑也。』とあり。又同年四月十四日の条下に『此頃小説神髓発刊終る。』とあり。明治十九年刊行の完本の首に「松月堂発兌」とありて「8才」本文の柱に「東京稗史出版社」とありて二者一致せざるは、作者の日記に言へるが如き事情ありしに由るものなり。本文に使用せる活字は清朝四号にして、句読点は行側に在り。

再版本 明治二十年八月発行。同体裁。

中央学術雑誌

異本 明治四十年六月発行「太陽増刊号明治名著集」に収載。〔9オ〕

?

〔8オの貼り紙〕

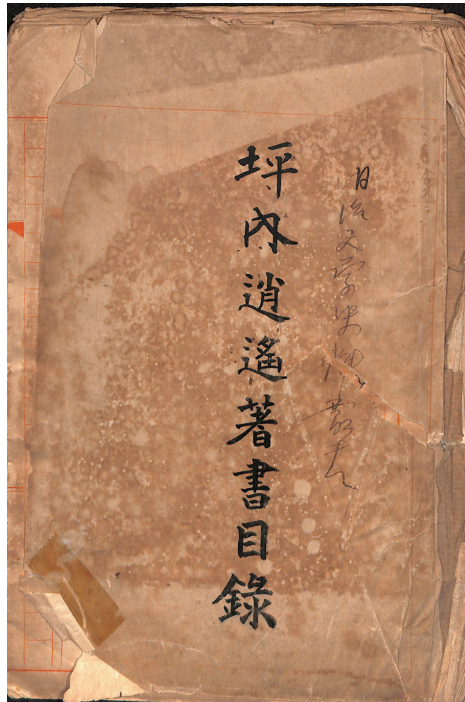
小説神髓合本 半紙摺美本 全三冊 定価  
金八十銭

19・5・17時事

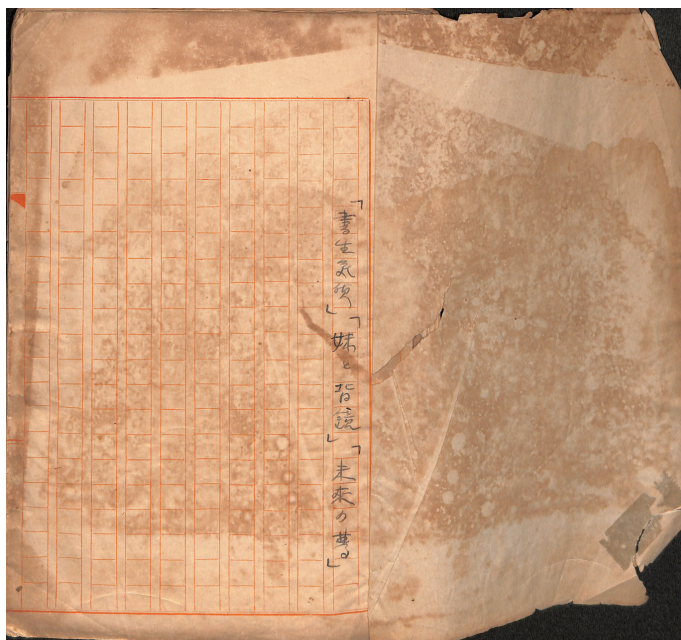
右は文学士部坪内先生東西の稗史を引証し小説の文体脚色等を平易に説かれたる未曾有の小説新論なり

東京本郷区湯島切通町三番地 書肆 松月堂発兌〔以上貼り紙〕

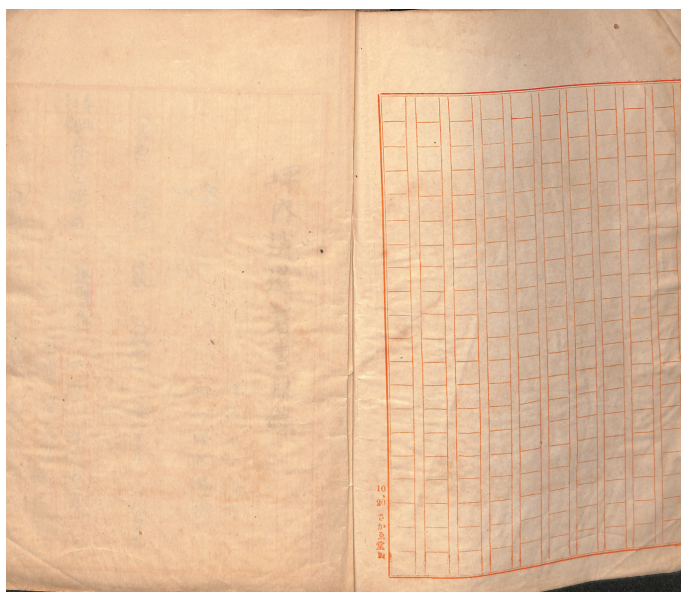
〔以下次号〕



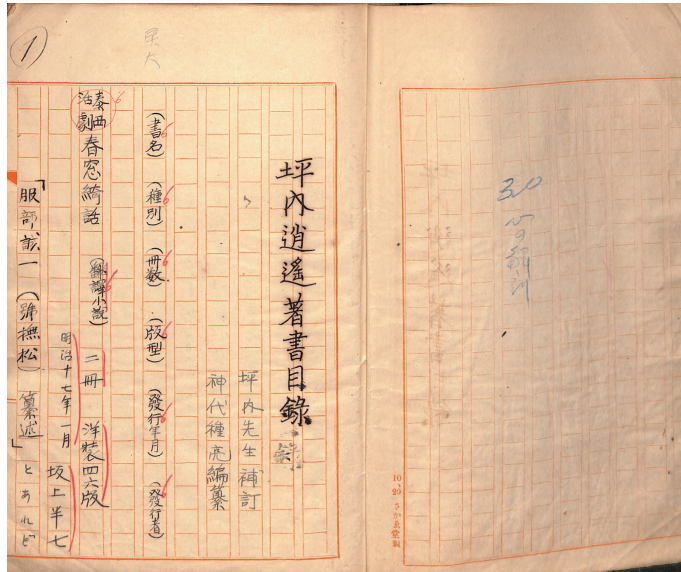
表紙



1才



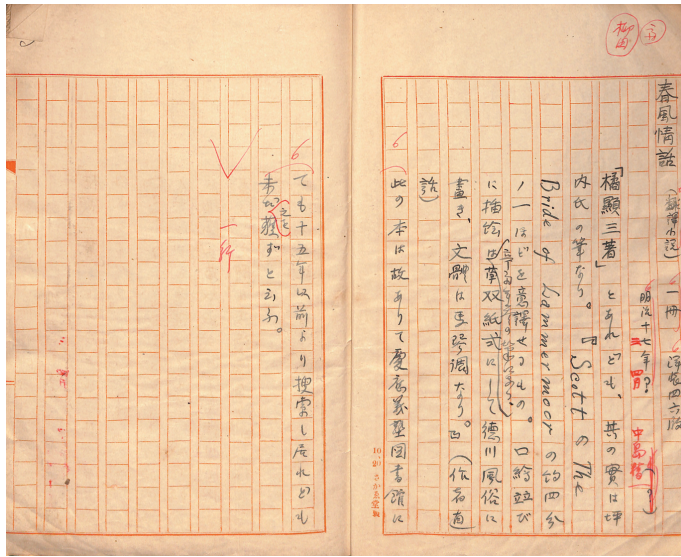
1ウ～2才



2ウ~3オ



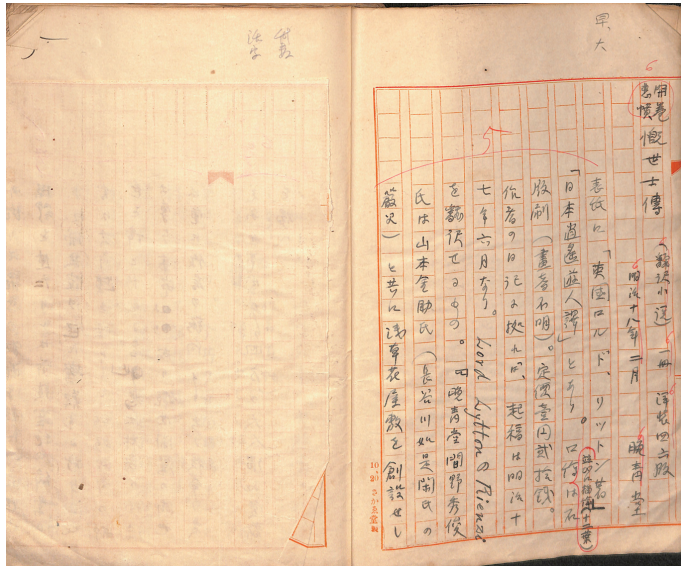
3ウ~4オ



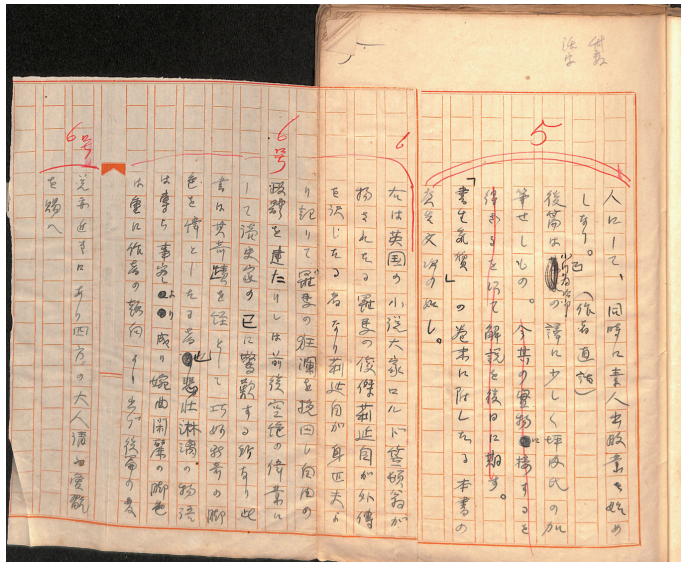
4ウ~5オ



5ウ~6オ

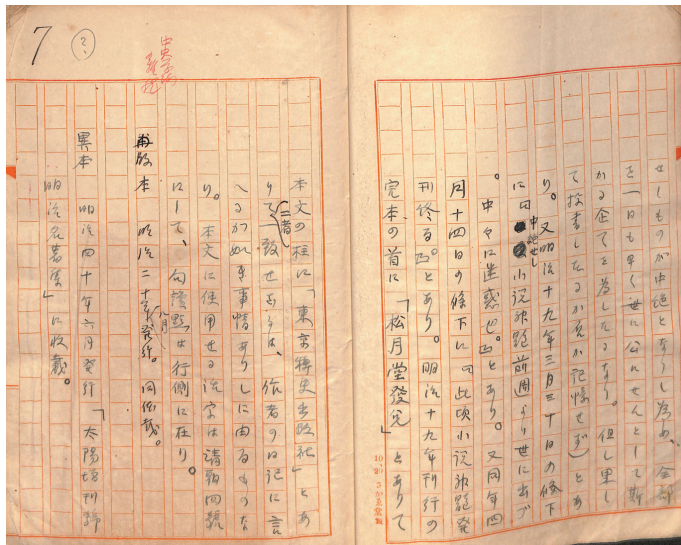


6ウ~7才



7才および貼紙





8ウ~9オ

## Abstract

### An Introduction and Transcription of *A Bibliography of the Works of Tsubouchi Shōyō* by Kōjiro Tanesuke (vol.1)

DEGUCHI Tomoyuki

This paper offers an introduction and transcription of the unpublished manuscript *A Bibliography of the Works of Tsubouchi Shōyō* (*Tsubouchi Shōyō Chosho Mokuroku*), compiled by Kōjiro Tanesuke, an intellectual active from the late Taishō to early Shōwa period. Although known as a prominent proofreader, Kōjiro's major contribution lies in his early recognition of the youthful works of Shōyō and his attempt to systematize them as bibliographical materials, a pursuit that preceded the establishment of the Meiji Bunka Kenkyūkai, widely regarded as the origin of modern Japanese literary studies. The present research transcribes this unpublished manuscript, recently found in the residence of Kōjiro's descendants, as a significant resource from the formative period of modern Japanese literary studies.

#### Key Words

神代種亮 坪内逍遙 著書目録 稿本

Kōjiro Tanesuke, Tsubouchi Shōyō, Bibliography, Manuscript